

## 【実践報告2】東浦町立東浦中学校

### 1 はじめに

東浦中学校は、通常学級21クラス・特別支援学級6クラスの合計27クラスの四つの小学校から入学してくる大規模校である。昔からの住宅地や他地域から移り住む方が多い新興住宅地、外国人が多く住んでいる団地などさまざまな特徴があり、正に多文化共生社会における学校と言える。

本校は「生徒の成長を第一」という教育理念の基に、学校の組織力と教師の教育力を強化することで、家庭・地域が手を携え、生徒が主体的に取り組むことができる教育活動を推進している。指導が困難な時代もあったが、今では多くの生徒が勉強に部活動にと、充実した学校生活を送っている。

本校の進路状況の特徴は公立高校への進学者が約7割と多く、そのうち地元の東浦高校への進学者は全体の2割程度である。知多半島の他の中学校に比べ、定時制・通信制や専修学校に進学する生徒が多い。また、近年の情勢から私立高校への進学も増えている。学校の体制としても、進路指導部を中心に、きめ細やかな進学指導や就職指導を行い、生徒の多様な進路希望に応える体制を整えている。

### 2 実践

#### (1) グランドデザインの策定・周知と教育目標の共有

##### ア グランドデザインの策定までの流れ

グランドデザインを策定するために本校職員の強み・弱みを整理した。資料1を見ると、強みとして教職員間の連携と教育目標の明確化が挙げられる一方、弱みとしては評価への認識とPDC Aサイクルの意識の低さが挙げられる。

次に、本校の生徒の強み・弱みを整理した。資料2を見ると現在の本校の生徒は指示がきちんと守れ、素直で優しい生徒が多い一方で、指示待ちの生徒が多く、学習面においては主体的に学ぶことができず、確かな学力を身に付けることにおいては課題が残る。

また、生徒の強みは東浦のことが大好きな生徒が多く、地域愛が強く、対話的学習では素直に学び合い・話し合いをすることができる。一方で弱みは行動力・決断力が弱く、考えて行動することのできない生徒が多いことが挙げられる。そこで、今後、

本校で身に付けさせたい資質・能力を三つ決定し、グランドデザイン（次ページ資料3）を策定した。

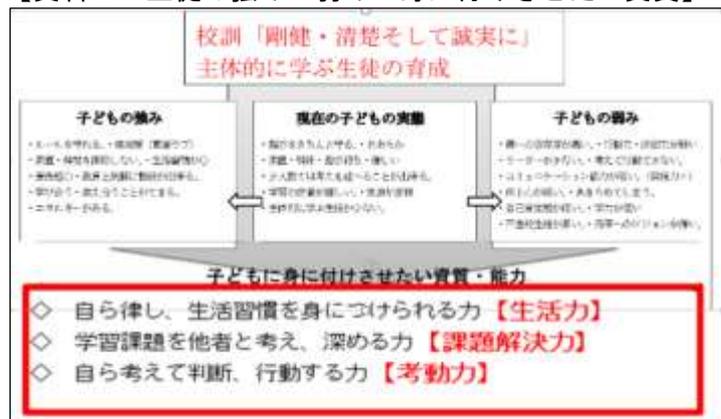
##### イ グランドデザインを受けての変容

グランドデザインができたことにより、教師の考え方に変容が見られた。さらに、教育目標や生徒に身に付けさせたい力が具体化されたことで、研究開始当初の令和2年度に比べ、令和4年度は意識の高

【資料1 職員の強み・弱み】

項目	令和2
学校の教育目標や重点目標は、「生徒に身に付けさせたい力」や「学ぶ生徒像」が具体的に記述されている。	3.2
あなたは、学校や学年を越えて、生徒の成長を促すために、働きを共有している。	3.2
教員は、教育と経営の条件を把握し、ビジョンを示している。	3.3
定期テストや実力テスト等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体の具体的な指導法を見直し、改善している。	2.3
教育課程の編成、評価や改善に全教職員が関わっている。	2.4
あなたは、国や教育委員会主催の研修に参加している。	1.9

【資料2 生徒の強み・弱み・身に付けさせたい資質】



まが見られた（資料4）。また、授業のPDCAサイクルについても以前は意識が低かったが、高まが見られた。特に学習評価については学習指導要領が改訂されたこともあり、各教科部会で議論したことが影響したと思われる。本校では6月・12月に生徒が教科担任を評価する授業評価アンケートを実施しており、生徒の言葉に耳を傾けて、授業改善をしている。

【資料4 グランドデザインを受けての教師の変容】

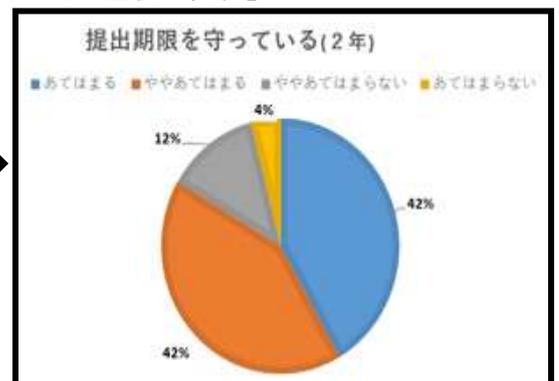
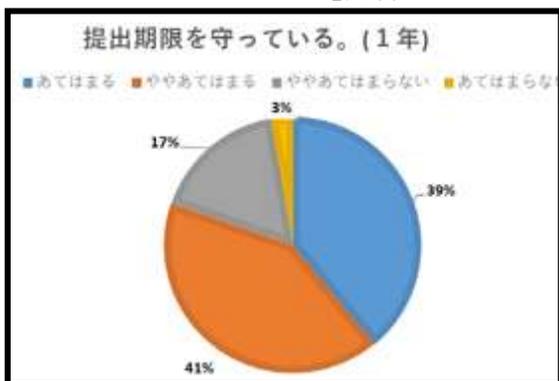
項目	令和2	令和3	令和4
学校の教育目標や重点目標には、「生徒に身に付けさせたい力」や「めざす生徒像」が具体的に記述されている。	3.2	3.8	3.9
あなたは、学校や学年を超えて、生徒の成長を伝えたい、喜びを共有している。	3.2	3.6	3.8
校長は、教育と経営の全体を見渡し、ビジョンを示している。	3.3	3.4	3.6
定期テストや実力テスト等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体の具体的な改善策を見直し、改善している。	2.3	3.1	3.3
教育課程の編成、評価や改善に全教職員が関わっている。	2.4	2.4	3.2
あなたは、国や教育委員会主催の研修に参加している。	1.9	2.6	2.8

ウ グランドデザインの周知

教師用のグランドデザインは生徒にとっては情報量が多いため、一目で見やすい簡易版を作成した（資料5）。そして、身に付けたい資質・能力について「生活力が身に付き、授業の課題解決力が育てば、さまざまな場面で考動力が育つであろう」と考え、数式にし、各学級に掲示し、テレビ朝会で周知した。

資料6は、現2年生の変容である。生活力の一つである「提出期限を守っている」の項目は、「あてはまる」「よくあてはまる」がそれぞれ微増し、「ややあてはまらない」が減少した。続いて、考動力に関する項目の一つである「クラスの雰囲気をよくしようとしている」の項目は、「あてはまる」「よくあてはまる」がそれぞれ増加し、「ややあてはまらない」は減少したことが分かる。

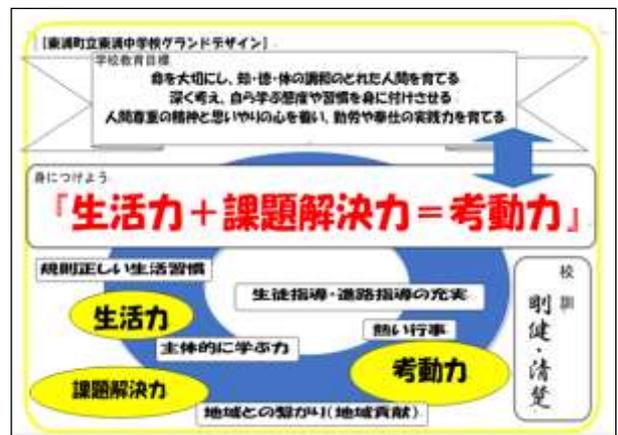
【資料6 グランドデザインを受けての生徒の変容】

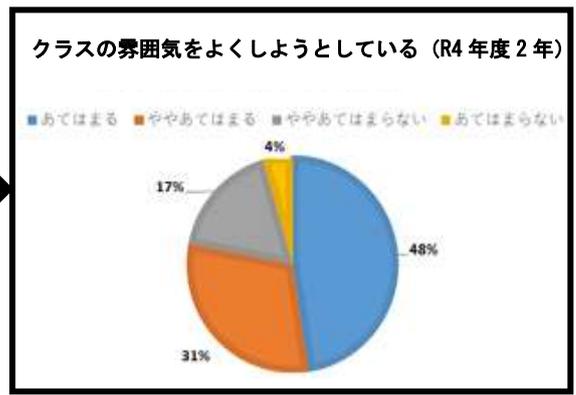
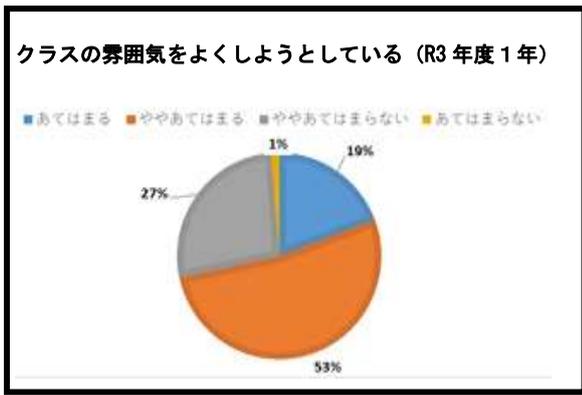


【資料3 グランドデザイン】



【資料5 生徒用グランドデザイン】





【資料7 各教科のカリキュラム・マネジメント】

○社会 (杉中)

テーマ	思考を深めるための時間と意見を伝え合う活動の工夫
目指す生徒像	習得した知識をもとに、自分の考えをもち、他者の意見と比較することで、自らの思考を深めることができる生徒
具体的学習立て	A 単元全体を通じた取組 ①立憲に於いて考える活動を設定する。 ②対話する活動を設定する。 ③単元の最後に価値判断する活動を設定する。 B 単元全体を通じた取組 ①本時のねらいを設定する。 ②単元全体を踏くねらいを設定する。 ③生徒同士で基礎知識を確認する場を設定する。 C 教師の工夫についての取組 ①資料を見せて、生徒同士で対話できるように発問を設定する。 ②資料を見せて、多様なオープン発問を設定する。

(2) 目標に基づくカリキュラム・マネジメント

ア 各教科のテーマ・目指す生徒像・手だての策定

本校では資料7のように教科部会で本年度の「テーマ」「目指す生徒像」「具体的な手だて」を考え、1年間を通じたカリキュラム・マネジメントをしている。

イ 授業実践

1年生社会科の歴史分野「平家がわずか5年で滅亡した理由を考えよう」について紹介する。導入で、資料8のように源平合戦のストーリーカードを封筒に入れて配布し、班ごとに並び替えをさせた。そして、本時の学習課題を示し、わずか5年で滅んだ理由を考えさせることで主体的な学習に誘うように工夫した。次に、追究活動として院政・平清盛のキーワードを調べ、知識の獲得を目指すよう指示した。そして、平家に味方をした身分の人は誰かを予想する発問の結果は資料9のようになった。平家に味方をした身分は優遇された商人のみであるといった多面的な見方を生徒に伝えることで、学習課題を主体的に話し合えるように誘った。そして、学習課題について話し合う場を設け、資料10のように五つの選択肢から選ばせ、理由を考えさせた。話し合いはワールドカフェ形式を採用した。まずは班で問いに対する意見を伝え合い、班としての意見をまとめ、班でその意見を伝える係と他の班に聞きに行く係に分担した。調査係が他の班で聞き取った情報を班に持ち帰り、平家滅亡のいちばんの理由とは何か再度話し合い、意見を再構築し、資料11のような結果となった。

【資料8 ストーリーカードを使った導入】



【資料9 平家に味方した身分について問う発問】

T: 武士・貴族・商人・百姓の中で平家に味方した人達は誰？

T: まずは予想しましょうね。

C: 武士10人 貴族7人  
商人10人 百姓0人

【資料10 学習課題についての選択肢】

- 課題に対する選択肢の提示
- A 平家の武力が弱かった (源氏が強かった)
  - B 武士の支持が得られなかった
  - C 経済政策に失敗した
  - D 平清盛が早く死んだ
  - E その他

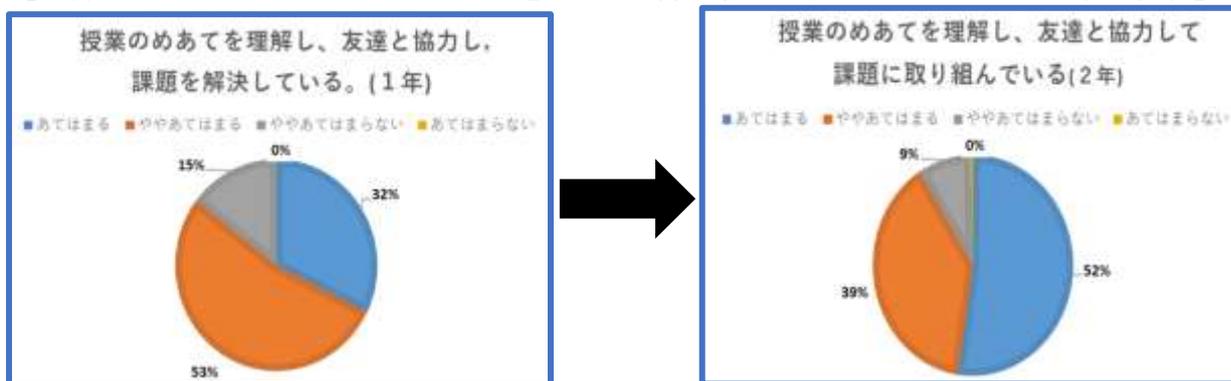
【資料11 各班の最終的な意思決定 (ホワイトボード)】

2. 武士の支持が×  
平氏の支配に対する  
不満が高まったから

3. 経済失敗....  
理由 貿易(日本)と武士が  
貴族や農民にメリットがなくて  
結果、商売になってしまった

以上の取組を通して、学習課題の一つである「授業のめあてを理解し、友達と協力し、課題に取り組んでいる」の項目で、苦手な生徒が減ってきたことが分かった（資料12）。

【資料12 カリキュラム・マネジメントを受けての課題解決型学習の取組における生徒の変容】



(3) 地域と目標を共有し、連携・協働した実践

P T A 役員の経験者や、地域の方で構成されている「東中サポーター」の方々に、花壇の手入れや、調理実習のサポートをしてもらっている。また、外国籍の生徒が多いため、タガログ語やポルトガル語の通訳が3名学校におり、生徒それぞれの日本語力に応じて取り出して学習をしている。さらに、外国籍の保護者向けの進路説明会も開いている（資料13）。長期休業中には学生ボランティアの大学生に数学を教えてもらう「わくわく数学教室」を開催している（資料14）。生徒は数学の復習ができることに加え、将来教員を目指している大学生にとっても、有意義なものとなっている。

【資料13 外国籍生徒への進路説明会】



【資料14 わくわく数学教室】



3 実践の成果と課題

成果としては、教員がそれぞれ、P D C A サイクルを意識して授業改善に取り組むようになり、教科部会で授業について議論し合いよりよい授業にしていこうという姿が見られるようになったことが挙げられる。また、育てたい力が明確になったことで、中学校3年間だけでなく、義務教育9年間の集大成を意識して、日々の教育活動に臨めるようになった。そして、多くの行事がコロナ禍以前に戻りつつあり、生徒からは行事を通してクラスをよくしていこうという雰囲気が見られるようになった。

一方、コロナ禍における地域連携の難しさや働き方改革における教員の負担軽減が課題として挙げられる。その教育活動が本当に必要か、更なる精選を図らなければならない。

4 おわりに

社会に開かれた教育課程を推進していくためには、以下の3点を押さえることが必要である。

- ・ グランドデザインを全職員で策定、共有した上で、育てたい資質・能力を明確にすることが重要である。
- ・ 教科指導に力を入れるためにはカリキュラム・マネジメントが大切である。各市町村で決められているカリキュラムの中で、学校独自にそれぞれの教科でテーマや目指す生徒像を明確にする必要がある。
- ・ まずは、学校の伝統、文化を整理・精選し、必要な行事・活動を行っていくことが求められる。